

9年間の交流校（インドネシア）と作り続ける国際フリーペーパー

～IT環境を活用したプロジェクト型国際協働学習経験の発展的循環を検証し促進する～

早稲田大学本庄高等学院

〒367-0032
埼玉県本庄市栗崎239-3

<http://www.waseda.jp/honjo/honjo>

1 研究の目的

本研究は第37回実践研究助成『一般』「8年間の海外交流校と作り出す国際フリーペーパー」の継続研究である。今年度は、単年度の実践で得られた協働学習経験を引き継ぐための支援の仕方を研究する。具体的な観点としては、

- ① 両校生徒と教員の間蓄積された経験を、両校内および両校間で引き継ぎ発展させるための手法を検討、特に教師の「見守り」と「指導(介入)」のタイミングと方法を考察
- ② 成果物(「国際フリーペーパー」)がより広く読まれることを目指し、各種メディアの活用方法を学ぶ。

に着目する。



2 研究の背景と動機

▶両校の関係と昨年度までの実践

早稲田大学本庄高等学院(以降、早稲田と表記)とインドネシア・ジョグジャカルタ市の SMA Negeri2 Yogyakarta(ジョグジャカルタ第二高校、以降ジョグジャと表記)との交流は9年に渡る。毎年8月のWorld Youth Meeting(以降、WYMと表記)を主催する日本福祉大学の仲介で交流が始まり、大会テーマに基づく特定の話題を協働して追求し英語で発表するという経験を重ねてきた。WYMは参加した生徒にとってはインパクトが大変大きい学びの場だが、その学びを享受できるのは少数の参加者(ジョグジャ2～3人、早稲田10人未満)に限られ、参加者同士の交流もごく短期に限定されていた。経験から得られた知見が蓄積されていないと感じ、より多くの両校生徒が参加できる通年のプロジェクトとして国際フリーペーパー製作を提案。幸いパナソニック教育財団のご支援のもとで2冊発行できた。

▶なぜフリーペーパーか

今年度の申請に応募する際に他の形態も提案してみたが、2011年度と同じスタイルの冊子(A4版、カラー8ページ)を同じ時期(8月と3月)に発行することを早稲田生徒が強く主張した。両校が完成品イメージと作業プロセスを共有しており、継続発展させやすいというのが一番の理由である。

成果物としての雑誌は関わった生徒に達成感を与えるのはもちろん、学校関係者やプロジェクト型教育活動に関心を持つ人々に一定のインパクトをもって認知され、英語で出版というハードルを超えるのに十分な動機づけとなる。

早稲田側は2012年6月には日刊紙の取材を受けた(朝日新聞2012年6月23日)。ジョグジャカルタでは学校の教育成果のひとつとして認知され、関係者に一定の評価を受けている。

▶ IT 環境と昨年度の生徒の取り組み

両校生徒は facebook や Skype を駆使しながら自主的かつ精力的に編集作業に取り組んだ。両校ともひとつひとつの IT 利用技術は情報の授業で全員が学んでいる。インドネシアは facebook 大国だけあって発信のスキルは高く、参加した生徒は生き生きした写真やコメントを適格な英語で表現する技量がある。早稲田側は高水準の IT 機器が整備されており、日本でみられるフリーペーパーのレベル以上の文書編集を学校で行うことができる。早稲田生徒は学校では主に編集作業に取り組み、学校外ではメンバー間で連絡を取るという時間の使い方をしていた。

▶ 昨年の反省と課題

ジョグジャ側は5人の生徒がフリーペーパー(以降、FP と表記)編集チームに選出され、通年で編集に関わった。そのうち2人は WYM2011 に参加するため来日した。早稲田側は4月～8月のメンバーが高3生5人、高2生7人、高1生3人で、うち半数が WYM2011 に参加した。高3メンバーは FP no.1 完成後引退した。

WYM2011 終了直後にジョグジャチームを東京に招待し、継続して編集に関わる両校生徒および教員が FP no.2 の方針を相談した。両校教員間の話し合いからは、学校文化や課外活動のカリキュラム上の位置づけの違い、生徒と教師の関係の違いなど、国際協働学習を進める上で留意すべき諸要素が具体的に見えてきた。特に生徒間での経験の伝達を促進させるという観点での教育文化の差は大きいと考えられた。

英語の力の差も問題の1つである。早稲田メンバーの英語力は中級レベルだが、facebook 上では一生懸命やりとりをしている。過去ログで使われた表現をみると、特に「依頼」「提案」「イメージ説明」のスキルで苦慮しており、パートナーの状況を想像し配慮した発信や受信のスキルはまだ伸ばす余地が相当ある。

そこで今年度の実践では、両校間のコミュニケーションのチャンネルを活かし、特に両校でメンバーが入れ替わる時期(4～5月、8～9月、1～2月)に手厚くケアすることで、引き継ぎと発展の円滑な循環を起こす方法をより明確にしたいと考えた。また、英語や交渉スキルの支援の面では、生徒の SNS 上のコミュニティーを壊すことがないタイミングの捉え方に細心の注意を払うことにした。

3 期待される成果

本実践の計画時に期待した成果は以下のものである。

▶ 有形の成果

1. 英語フリーペーパー: 『FP no. 3, no. 4』 A4版カラー8ページ 250部×2回(no. 3 は2012年8月、no. 4 は2013年3月発行予定)
2. 指導用ハンドアウト・資料集: facebook 交流用の英語表現 TIPS 集、雑誌の文体サンプル集を想定

▶ 無形の成果

3. 複数年にわたる国際協働学習での発展的循環モデル構築
4. 参加者を広げるため通常授業の成果を活用し、より「真正(authentic)」な学習経験の場を創造

4 実践の記録

プロジェクトの展開は2012年度とほぼ似たような経過になった(展開例については第37回実践研究助成報告もご参照ください)。本項では月ごとの実践の記述は簡略なものに留め、8月の対面交流のインパクト、12月のジョグジャカルタ訪問(教員のみ)を重点に報告する。

4.1 参加者

【教員】昨年度と同様である。ジョグジャ側は Tri Indaryati 先生(英語科)が中心となり、日本語科と情報科の教員が支援した。早稲田側は筆者(英語科)が中心となり、英語科と情報科の教員が支援した。

【生徒】ジョグジャ側は教員に選抜された高3生5人で編集チームを構成し、うち2人が WYM2012 にも参加した。facebook で発信していたのはこの2名だった。早稲田側は ESS 部員の有志で、no.3 編集には高3生7人、高2生1人、高1生6人が参加した。高3生は昨年からの継続参加である。WYM2012 には高2生3人が参加した。3人のうち2人(うち1人は昨年、FP と WYM の両方に参加)は ESS 部員だが、3人とも今年は FP 編集メンバーではない。



両校 FP 編集チーム ミーティング



本庄高等学院訪問、生徒が説明



スカイツリーを見るのが楽しみだった!

4.2 プロジェクトの展開概要

▶4月～5月

両校で編集チームを結成、早稲田側で企画会議開始。No.3 のテーマは「青春」になる。

▶6月

上旬: Tri 先生からジョグジャメンバーのリストをいただき、オンライン交流開始。

中旬: 早稲田側で no.3 の企画案概要をまとめ、facebook 上でオンライン編集会議開始。

▶7月

中旬: 誌面作成が急速に進展。facebook 上のやりとりがアンケートや提案など、質・量が増える。

下旬: ジョグジャ側から大量の写真と原稿が届き、早稲田側で誌面をほぼ完成。7月25日に入稿。

▶8月

上旬: WYM2012 のために Tri 先生とジョグジャメンバー2人が来日。合宿で発表内容を集中的にまとめる。

中旬: 8月7～8日の大会終了後に東京の宿に移動。9日は本庄訪問、10～11日は東京で対面交流。

9日の当校訪問の際に、FP no.3 が9日に納品され、ジョグジャメンバーに手渡すことができた。

また10日の午前中はミーティングを行い、次号 no.4 のテーマを大まかに決めた。

下旬: 早稲田側では WYM 参加メンバーが校内で活動報告。次年度での参加を強く勧めていた。

▶9～11月上旬

早稲田側では3年必修科目「リーディング」の投げ込み教材として FP no. 3 を使い、気に入った記事とその理由を80人の高3生に書いてもらう。

早稲田側の新編集メンバーは高1生6人に。試験を含む学校行事のため、双方とも活動が休止状態。

Tri 先生が他校の生徒さんに依頼した感想文が届く。文化祭で FP no.3 の拡大版と一緒に掲示。

▶11月～1月

facebook 上のやりとりが再開したが、ジョグジャ側も試験期間に入りやりとりの頻度は低い。

筆者が冬休み中に先方を訪問、学校も見学させていただく。1月に早稲田生徒たちに様子を報告。

動画用ビデオを試作、音声入力 of 技術を検討。

▶2月～3月

双方とも学年末の厳しいスケジュールの中、写真や記事の作成にあたっている。入稿日が遅くなり、no. 4 の発行は4月の予定になる。

4.3 2回の対面交流

▶8月の交流(愛知、本庄、東京)

今年は早稲田側の WYM 参加メンバーが FP 編集に関わっていないため、ジョグジャの生徒2名は7月は FP 編集と WYM の発表内容検討を並行して進めていた。両名とも能力が高いとはいえ、負担感は相当あったと思う。WYM のための準備合宿の間、Tri 先生に facebook 上で早稲田の生徒が使っている英語の表現について感想をお聞きした。意味がわかりづらい質問が時折みられるものの、ジョグジャの生徒が感情を害するような表現は特に見当たらないとのことだった。ジョグジャメンバーの意識は意図の解釈に向いており、談話上で不適切ともとれる表現があっても気に止めていないと推察されていた。

筆者が Tri 先生と教育文化について濃密な懇談をしたのは、WYM での発表に対する評価が期待していたのと若干異なったことがきっかけだった。発表内容の「オリジナリティ」の解釈や、WYM を経験した卒業生の支援を活かすことなど、発信する内容を充実させるためのアプローチについて、それぞれの学校の状況を説明しながら深い議論をした。この時点に至って、交流は9年に渡るものの本校からジョグジャカルタを訪問したことは1度もないことに思い当たり、12月の訪問を思い立った。

昨年は対面交流は都心だけにとどまったが、今年は本庄に日帰りで招待することが可能になった。早稲田側は高1～高3の10人がバディに手を挙げ、交替で観光案内をつとめた。うち2人は WYM 経験者で Tri 先生と面識があり、また他の2名は9月に別のプログラムでインドネシアを訪問することが決まっている生徒だった。高3生は2人で両名とも英語で話し合いができる力量があり、FP や WYM に参加することがジョグジャの生徒間でどう受け止められているのか、といった突っ込んだ話も聞いた。次号のための編集会議は10人のうち高1生5人は FP no.4 の編集メンバーになった。

▶12月の訪問(ジョグジャカルタ)

Tri 先生に相談したところ、学校をインフォーマルに訪問できるように手配してくださったので、半日学校見学をさせ

てもらった。校長先生と異文化交流や英語の指導をされる先生方数名とお会いしたほか、WYM を経験した卒業生(大学生)も都合をつけ、歓迎してくれた。

印象深かったのは、校長室にずらりとならんだトロフィーや賞状である。生徒さんの活躍の証が飾棚にあふれており、特に WYM 参加者に送られる毎年の表彰状が並べて掲示されていた。また Tri 先生と来日した2人の生徒の写真がポスターとして大きく掲示され、WYM チームへの期待の高さをうかがわせた。FP も学校の掲示板に張られていた。校長先生は大変気さくな方で、先生方や卒業生との会食場所に校長室を快く提供して下さった。たまたま12月の成績発表の日ということで保護者が各担任と面談をしていた。全体を見学していくうちに、学校文化で秩序と民族の誇りが重んじられていること、授業の密度の高さ、長幼の序列が日本より厳しいことなどが感じられるようになった。

見学してきたことは1月に早稲田生徒に報告し、学校文化やジョグジャカルタの文化と合わせて伝達した。報告内容の一部は FP no.4 のサブテーマを相談する上で多少の示唆になったようである。

5 成果と考察

5.1 有形の成果

(1) FP no. 3 予定通り刊行できた。内容は「青春」という日本語と “pemuda” というインドネシア語の比較、「青春している」と思う時、青春時代のアップダウンと立ち直りの方法についてである。2号から更にコラボレーションを感じさせる構成とデザインが向上した

(2) FP no. 4 予定より大幅に遅れ、4月刊行になる。読みやすさでは好評だった2, 3号のデザインを踏襲したページと、紙上チャットの形態のページがある。3号に対する「読者の声」を考慮した企画である。

(3) 読者のコメント集

早稲田とジョグジャそれぞれから集めた読後感からは、読者側の差異が読後感に反映されているとうかがえた。早稲田側はデザインに言及したものが少なからずあり、記事の好みは様々だった。バイリンガルレベルの読み手からは、努力は認めるものの内容の深みがもの足りないのとコメントもきていた。ジョグジャカルタの他校の生徒が気に入ったとした原稿は、FP no.1 にジョグジャの生徒が書いた、伝統ハーブティーの効用の記事だった。自由研究に基づいた長い記事が、すっきりしたデザインでまとめられている。読み手の英語力や記事の背景がわかることが高評価の理由かと思われる。

授業の教材として試用してみたところ、早稲田の生徒はかなり真剣に読んでいた。読む姿勢は好意的で、同じ学校の仲間が作った英語の雑誌、という敬意がほの見える。生徒が書き手と読み手になる可能性は今後追求する価値があると思われる。

(4) facebook 上のやりとりの記録

ジョグジャのメンバーは WYM にも参加した2人が通年で発信したが、早稲田側は年度の前半と後半でメンバーが入れ替わった。前半は表紙と3つの見開きをそれぞれ1人の3年生がサブリーダーとして担当したため、個々の表現の力量や誌面構成によって発信内容の複雑さが変化していた。昨年の編集作業経験から、早稲田側のメンバー間では「発信する時は必ず具体的な提案をしよう」と合意ができていた。提案までは時間がかかったが、いったんイメージがまとまると試作ページを作り、コメントに必ず画像を添えて「こんな感じではどうか」とジョグジャ側に尋ねていた。

前半で筆者が facebook に介入したのは、早稲田側の質問が意味が取れない英文になっていてジョグジャ生徒が困惑していた時と、日本語の「青春」とインドネシア語“Pemuda”の違い、といった抽象的なディスカッションが展開されていた時である。このテーマの担当生徒は対面でも相談してきたため、facebook 上の介入が作業を進める支援になったかどうかは不明である。



学校訪問:FP の掲示



歓迎してくださった校長先生



Tri 先生と卒業生たち

後半は早稲田側は1年生のみのチームになった。8月の対面交流でテーマはジョグジャ側と合意できており、「読者の声」を受け取れたこともあって早稲田側の企画案は早くまとまったが、発信者は英語圏の中学出身の1名に絞られた。流暢さは申し分ないが、タイムマネジメントのスキルは3年生メンバーとはやはり差があり、表現よりも発信のタイミングで苦慮している様子がうかがわれた。

5.2 無形の成果

▶ 国際協働プロジェクトにおける教師間の交流について

各地域の学校文化やそれぞれの教育機関が抱える事情に精通してからプロジェクトに取り組むのは理想だが、現実の展開はなかなか事前準備の時間のゆとりを与えてくれない。また、学校文化はその地域の歴史や社会情勢に深く根ざしており、外部の者が簡単に「理解」できるものでもない。したがって、国際協働プロジェクトを手掛ける場合には

- 1) 具体的な成果物は何かを共有する。成果が未知の企画の場合は、試作品や類似のものを提示して、共有するイメージをなるべく近いものにする。
- 2) その成果物をつくることで関係生徒にどのような利益があるかを共有する。
- 3) 学校の行事予定を把握しあい、生徒や教員が協働学習に関わる時期を共有する。
- 4) 理想より小さくても着実な成果物をまず作りだすことを開始時の目標とする。

というように、成果がわかる形でスタートすると比較的円滑に進むと考える。

プロジェクトが継続発展する局面では学校文化の差異が微妙な摩擦をもたらす場合がある。その際、大変でもやはり相手校を相互訪問して、パートナーの教育観の「根」を推察することは重要である。

▶ 異学年集団のもつ力

高校生の学年による力量の差は大きく、経験を伝えていくにはやはり各学年でリレーをしていくのが望ましいと感じた。ジョグジャ側では学校の制度上、協働学習経験を異学年のリレーが日本よりも起こりにくい状況があるように見受けられた。しかし、Tri 先生は日本の各校のリレーをつぶさに観察され、WYM の OB からの伝達を発案、実施された。早稲田側では異学年のリレーはひとつの学校文化になっているが、何かの事情で特定学年が関わらない状況が起こると、経験の蓄積は簡単に薄らいでしまう。

教師に求められる力量は、生徒間の伝達を信頼し自発性を育てる局面と、目標とする水準をはっきり提示し、そこに到達するためのスキルをトレーニングする局面を見分け、適切に支援方法を使い分けることではないだろうか。

2か年の通年のプロジェクトは、その前の7年間の一時期だけの交流よりも内容の濃い経験をもたらしてくれたといえる。IT 機器の発展充実により、学習者も自分の言葉を発信する主体となる時期も遠くない。生徒たちが作った英語の雑誌が具現化へのひとつのステップとなるように、今後も実践研究を継続していきたい。

パナソニック教育財団の2か年のご支援に心から感謝申し上げます。

参考文献

早稲田大学本庄高等学院 「8年間の海外交流校(インドネシア)と作り出す国際フリーペーパー
～グループスキルとネットワーク活用による国際協働学習モデルの構築を目指して」

パナソニック教育財団 第37回実践研究助成報告書 2012年3月

朝日新聞 「英字紙 海越えた友情」 朝日新聞 2012年6月23日(土) 朝刊埼玉県版『きょういく埼玉』